若手保育者における共感性

—失敗経験の内容と精神的健康状態の把握—

○木野和代¹ 内田千春^{2#}

(¹宮城学院女子大学 ²共栄大学)

Key words: 若手保育者, 多次元共感性, 失敗経験

目 的

共感性は保育者に欠かせない資質の一つとして重視されているが(e.g., 秋政他, 2009), 多様化する保育現場では共感しすぎることが, 共感疲労に結びつくことも考えられる。また, 他者のことを思っている行動が否定的な結果を招く可能性もある。そこで木野他(2011)は, 保育者志望の学生を対象に共感疲労に陥りにくい共感性のあり方を明らかにし, 保育者の精神的健康を維持し長期的な職場貢献を可能にするような対応策を検討・提案することを目指してきた。これまでの調査から, 共感性の下位側面である被影響性および自己指向的反応の問題やレジリエンスの低さの問題が示されてきた。

本研究では若手保育者7名の事例をもとに, 現在の精神的健康状態と保育者養成課程時代からの共感性およびレジリエンスの様相との関連および現場での職務経験の関連を検討する。また, 園児らのために良かれと思っている行動がうまくいかなかった事例等を収集し, 否定的な結果をもたらさないような共感性の育成プログラム提案のための基礎資料とする。

方 法

■参加者: 東海地区の4年制大学・保育者養成課程を2013年度に卒業した女性保育者(養成課程在学中からの縦断調査への協力者。公立4名, 私立3名)のうち, 事前に承諾の得られた7名を対象とした(保育者A~G。年齢は23~24歳)。

■手続き: 2015年10月に調査協力の依頼メールを配信した。同意の回答が得られた者へのみ, 11月に郵送調査を実施した。

■質問紙: ①多次元共感性尺度10項目版(木野・鈴木, 2015): 他者指向的反応(OR)・自己指向的反応(SR)・被影響性(SE)・視点取得(PT)・想像性(FA)の5下位尺度について各2項目, 5段階評定。②レジリエンス尺度(森他, 2002): I AM(自分への肯定的評価), I HAVE(対人的安定性), I CAN(問題解決能力), I WILL(将来への楽観性)の4下位尺度について, 各2項目を抜粋使用, 5件法。③WHO-5 精神的健康状態表(1998年版): 最近2週間の状態について5項目・6件法(0-5の配点)。④職務状況に関する質問: 園の規模, 園での担当, 園内の人間関係, 職務上の困難感, 上手い/下手なことなどについて, 自由記述により回答を求めた。なお, ①②については, 在学時調査においても実施した(時期は表1参照)。

結 果 と 考 察

■職務状況(職務上の困難感や失敗経験): 保育者として働き始めて感じたことについて, 4名(B・E・F・G)が事務仕事などの保育以外の仕事の多さに言及した。子どもやクラス運

営・保護者のことに関する困りごとについては, 6名(A以外)が保護者対応について記述した。このうち3名は気になる園児の存在も記述した(D・F・G)。これらの内容は, 加藤・安藤(2013)による新任保育者の抱える困難を検討した研究において報告されたものでもあった。残る1名(A)は, 紙面では書けないほどいろいろありすぎると回答した。

■精神的健康状態の傾向: 得点可能範囲は0~25点で, 13点未満の得点は精神的健康状態が低いとされる。7名中6名が基準以下であり(表1), 本研究の若手保育者の場合は, 精神的健康状態が良いとはいえない者が多かった。

■精神的健康状態と, 共感性・レジリエンスの様相および職務状況の関連: 最も状態の良い保育者Gの共感性は, SE以外で高めに推移しており, SRは低下傾向にあった。一方, 健康状態の悪い保育者A・Cの共感性については, SEとSRが上昇傾向・高止まりしていた。加えて, 病気や療育対象の子どもへの対応に関する言及が特徴であった。保育者Aについてはレジリエンスも全体に低かった。不健康群における, 共感性のこれらの特徴と困難な子どもへの対応に関する言及の符合から, 共感性のこれらの側面は, 困難な子どもへの対応時に, 実際に問題となる可能性を確認できたといえよう。

子どもやクラス運営・保護者に関する困りごとについて相談相手がいない者はいなかったが, 精神的健康状態がよくない者ほど, 相談相手として挙げる対象の多様性に乏しい傾向と, 対人的安定性(レジリエンスのI HAVE)が低いまたは不安定な傾向がみられた。精神的健康状態が良いもののほど, 園内の相談相手として, 園長などの管理職をあげており, 若手保育者の精神的健康における多様な他者からの支援の重要性が示唆された。

■他者のためを思っている行動が上手い/下手なこと: 3名(C・E・G)は他の保育者との間のこと, 他の3名(A・B・F)は園児や保護者との間のことを挙げていた。後者の例から, 子どものためでありながら, 保護者の視点にたった情報伝達の難しさが推察された。また, 保育者A・Bの内容は, 子どもや保護者との日常的なコミュニケーションであったが, Fの内容は気になる子や障害児の支援に関わるコミュニケーションであり, 専門性も求められるやりとりであったと考えられる。これらの事例を考慮して, 否定的な結果をもたらさない共感性の育成プログラムを検討したい。

(Kazuyo KINO, Chiharu UCHIDA)

*本研究の一部は, 科研費(研究課題番号26380943)の助成を受けた。

表1. 若手保育者7名の共感性およびレジリエンスの得点状況(在学時から就業1年半後まで)

	保育者A(5点)				保育者B(8点)				保育者C(9点)				保育者D(12点)				保育者E(12点)				保育者F(12点)				保育者G(18点)			
	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4	T1	T2	T3	T4
OR	10	9	9	9	9	8	9	8	9	8	8	8	10	8	9	9	8	10	8	8	7	6	7	7	10	10	10	9
SR	10	9	7	10	8	8	8	8	6	7	7	8	9	9	9	8	8	9	8	8	7	9	8	7	10	9	8	7
SE	4	6	6	8	7	8	6	7	5	4	6	7	4	8	6	4	7	9	8	8	7	8	8	6	8	6	7	7
PT	8	7	8	6	6	6	5	6	7	7	7	7	10	10	10	10	7	6	8	8	7	6	6	8	7	9	9	8
FA	4	3	6	3	9	8	8	7	9	6	7	7	7	5	4	6	7	8	9	8	8	7	8	8	9	9	10	9
I AM	3	2	2	2	6	7	6	7	7	5	6	5	9	6	6	9	4	6	4	6	5	6	5	4	6	7	8	8
I HAVE	4	5	4	8	8	5	7	10	9	7	7	6	10	10	10	10	9	10	9	10	9	9	8	8	10	8	10	10
I CAN	8	6	5	6	7	5	6	6	7	7	8	6	8	6	6	9	6	7	6	6	6	5	5	6	10	9	9	10
I WILL	4	2	2	2	7	8	6	8	7	6	7	6	6	6	6	9	6	6	7	8	8	10	10	8	5	9	9	10

注1) 保育者の右の括弧内の得点は, 精神的健康状態得点。注2) T1: 1年次前期, T2: 3年次前期, T3: 3年次後期, T4: 就業1年半後